



2021年9月

今年の8月は例年とは違い、雨の日が多かったですね。皆さんは夏休みをどのように過ごしたのでしょうか？

今回ご紹介する本は、『**チム・ラビットのぼうけん 改版**』アリソン・アトリー作 石井桃子訳 童心社 2008年です。うさぎが主人公のお話ですが、この作品も雨の場面が度々登場します。この本が日本で出版されたのは1967年と50年以上前からあるお話なんです。1884年生まれの作者アリソン・アトリーは1920年代の終わり頃から児童文学作品を書き始めたそうです。少女時代に過ごした自然豊かな環境が、このような素敵なお話を作らせてくれたそうですよ。

チムは子どものうさぎで、知らない様々なことがらをお母さんうさぎや、色々な動物に聞いて、知識を増やしていきます。チムのお母さんは何でも優しく教えてくれます。そんな環境で育ったチムも心優しいうさぎです。“かかし”が登場するお話は特に心が温まります。かかしが、ほんとうに欲しかったものとは、「からだのつめものもうすこし おてんとうさまが てるように。」ではなくて、「いつもいつもきてくれる おともだち」で、物よりも心の繋がりの方が大切であることに気付かされます。

この本のお話では、物がよく無くなります。見失った物、ある動物にとられてしまった物など……しかし、失くした物は回りまわって、最後にはいくべき者の所に辿り着きます。読んでいる際は、どうなるんだろうと心配になりますが…。その一つが、チムが人間の赤ちゃんの靴を拾ったお話です。赤ちゃんの所へ靴を渡しに行こうとするのですが、その途中で、動物たちに気に入られて、無くなってしまいます。ひよんなことから、チムの所に戻ってきて、人間の赤ちゃんに持って行くのですが、チムが、ぶなの葉っぱに「ただのうさぎでないうさぎからのおくりもん」と書いた手紙を添えるシーンは可愛くて癒されます。また、この赤ちゃんの靴は、チムの手に戻ってきた時には汚れていたため、チムのお母さんは“しゃぼんそう”という植物を使用して洗います。“しゃぼんそう”は、古くからせっけんの代りに使われているそうですね。

ここで、なぞなぞです。「かべは ま白い だいいせき。 そのうちがわに きぬのかーてん。 すいしょうのような いずみの中に、 金のりんごが なっている。 このおしろには いりぐちがない。 それでも、 どろぼうは しのびこみ、 金のりんごを ぬすんでく。」とは、一体何のことでしょうか？チムからのなぞなぞです。皆さんの中には分かった方がいらっしゃるでしょうか？ちなみに私は分かりませんでした。答えを見てなるほど～となりました（笑）答えはこの本に書かれています。気になった方はぜひ読んでみてください。中川宗弥さんの挿絵も可愛いので、注目して読んでみてくださいね。

